

「フツキ（富貴）」をめぐって

沼 本 克 明

目 次

- 一、問題の所在
- 二、「富」の字音
- 三、「フツキ」発生の契機と時期
- 四、「富貴」の音形の変遷
- 五、「早」「牛ゴ」との関係

一、問題の所在

現代漢語を総覧すると語中に促音を有する多数の漢語が存する。それ等の殆ど大部分は所謂入声に属する字が下接無声子音字と合する事に依って促音化したという日本語の音韻変化の下で説明し得るものである。然し、極僅かではあるが、そういう駆流としての音韻変化では説明出来ないものが見出される。即ち、本来入声字でないものに促音化した例が見られる。実例で示せば次の如きものである。

キツカイ（奇怪）

ギツシヤ（牛車）

「フツキ（富貴）」をめぐって

キップ(氣風)

ケツタイ(希代)

サツキユウ(早急)

サツキユウ(遡及)

サツソク(早速)

トツクと(篤と)

フツキ(富貴)

ヨツポド(余程)等。

これ等の促音化の経緯については勿論種々の場合が含まれているのであるが、日本語の促音に就て総合的に論じられた浜田敦氏は、右の中本来「ーウ」である一群の場合について次の様な論を示された。『今一つやはり漢語に於いて促音化するものは、「サツソク(早速)」「サツキユウ(早急)」「フツキ(富貴)」「ギツシャ(牛車)」の如く仮名で普通「サウ」「フウ」「ギウ」などと「ウ」で表記される文字である。かかるものが促音化したのは、一には「早速」「早急」の様に物事を速かに行ふことを意味する語である為、その様な感情を表現するのに最もふさわしい促音に化したものとも考へられるが、一には又やはり母音と促音との調音部位の類似による転換と考ふべきものであらう。或はそれ等の中には、上述の唇内入声音への類推によるものもありはしないかと思はれる。即ち唇内の入声韻尾が、平安朝中期以降、語中尾のハ行音ワ行音の趨勢に伴って「ウ」と表記されるに至り、逆に元来「ウ」であったものが「フ」と表記される事もあった為、本来唇内の入声音でないサウ・フウ・ギウなどの文字までも、それが時に入声音サフ・フフ・ギフであるかの如く誤認されることよって、促音化したと云ふことも考へられはしまいかと思ふ。』(「人文研究」第一号一卷「促音と撥音(上)」)と論じられている。即ち、一「早速」「早速」の如きは意味に伴う感情を表現するにふさわしい促音化、二母音と促音との調音部位の類似に伴う転換、三

。新明解国語辞典

(サクキユウ(邇及) キフ「そきゅう」の変化)

フッキ(富貴) 「古」「ふくき」の変化

。日本国語大辞典

サクキユウ(早急) 「さつ」は「早」の慣用音

(サクキユウ(溯及) キフ「溯及(そきゅう)」の慣用読み)

右の辞典類に於て、参考に取上げた「サクキユウ(邇及)」を「サクキフ」(つまり「邇」の音符「朔」から類推した誤読形)からの促音化形と考える点は全て共通している。この点は、「ソキフ」という形が変化する事に依つては「サクキユウ」は生じないという日本語音韻(史)の常識論で解決出来る点であろうから全く問題とされてはいない。然し、「富貴」については、右の辞典の範囲でも三説に分かれている。広辞苑が「フキの転」とする意味を直ちに限定して把える事は出来ないが、促音介入と把えたものであろうか。広辞林、新潮国語辞典は「フウキ」の音便としている。新明解国語辞典は「フクキ」の変形形としているが、これは、「富」の(音符「富」の類推による)誤読から生じたとするものである。(さすれば「邇及」と全く平行的な関係に有することになるから、当該辞典の説明は若干不統一の観を免れないように思われる)。尚、「牛車」「早急」「早速」については何れも特に説明が加えられていない。

扱、右の辞典類に依れば、浜田氏が「早急」「早速」「牛車」と同列に把握された「富貴」には、そういう「ーウ」の音便とする考え方と、それと別に「フクキ」から出たとする新しい考え方が提出されているのである。この様に「富貴」を「富貴」からの発生とする考え方は、本誌第二集の三保忠夫氏の論文にも見られる。『富貴豪勢(十七オ一)』これも促音化を表

示したものであろう。この「フツクキ」は、「フウクキ」の促音化とみるのが一般的であろうか。別に、「富」が唇内入声音「フフ」であるかのように「誤認されることによって、促音化したと云ふことも考へられはしまいか」(注11文献10五頁11沼

本注、先引浜田氏論文¹¹)との意見があるが、更に、一案として、それが喉内入声音「フク」であるかのように誤認され、これが促音化したということも考えられまいか。「富」は流撮有韻に属し、その反切は「府副反」、「方副切」である(『刊謬補欠切韻』、『唐韻』・『広韻』などの切韻系韻書)。反切下字「副」は有韻としての用法だが、同文字は屋韻・職韻にも属している。また、「富」の旁「富」そのものも、屋韻にも職韻にも所属している。こうしたところに、「富^{フツ}宥^{フツ}」(『節用集』永祿本)、「富^{フツ}宥^{フツ}」(妙本寺本『いろは字』)といった誤読、もしくは推読が行なわれたとしても不思議ではない。他ならぬ本資料でも、他の箇所にも見える「富」字は、三例とも、みな「フク」と付訓されている。富饒^{フツネ}(二例)・富人^{フツネム}(二例)してみれば、「富^{フツ}」が入声音の「フク」であるかのように誤認され、これが促音化したということも考え得るのである。(『漢字音の促音化とその表示法——お茶の水図書館蔵光明真言王抄箱信記による——』)。三保氏の右の論及は鎌倉時代の具体例の提示を伴って、その説得力は大きいのであるが、それと断定する為には尚「フウキ」からの音便であり得ない事をも言う必要がある。

筆者も亦、字音資料を取扱う過程で、かつてから、この「フツキ」は「フクキ」という誤読に依って出現したものであると考えていた。本稿は、この種の問題はまず個別の検討を要するとする立場からこの「富^{フツキ}貴」の成立を驥尾に付いて、別の角度から若干の蛇足を加えてみようとするものである。

二、「富」の字音

「フツキ」を「フウキ」の音便とする考え方、或いは「フ」への類推過程を経たとする考え方は、ギツシャ(牛車)・サツキユウ(早急)・サツソク(早速)と同じ変化をたどったとする前提で生まれたものであるはずである。しかし、こういう考え方の前提に於て既に問題となるのは、「富」字は、「牛」「早」が古くから「ギウ」「サウ」と二字仮名表現されていたのに対し、本来日本字音の形としては一字仮名「フ」であったという点である。

今、その具体例を呉音資料・漢音資料に分けて少しく示してみる。

「フツキ(富貴)」をめぐる

◎呉音資料

○九条本法華經音

富フ普フ遊フ反

○保延本法華經單字

富フ普フ遊フ反

○聖衆來迎寺本法華經卷第一院政期点

富フ單フ那フ (音訳字)

○安田八幡宮本大般若經卷第一建保三年頃点

得フ富フ

○東寺本貞元華嚴經卷第十一寛喜二年点

富フ・包フ

○専修寺本西方指南抄康元元年写本

富フ貴フ (上末・下末計二例)

○観智院本類聚名義抄

富フ……末フ

右に見られる様に呉音資料では「フ」であり、声調は「平声」であったと考えられる。法華經音・法華經單字で去声(上声)が加えられているのは去声一拍字の變化形となつてゐるのは、それが經本文の初出例「富フ樓フ那フ」を取り上げ、以下の意識「財フ・富フ・大富フ・巨富フ等」が、それに振せられてしまつた為である。要するに、鎌倉時代の「富」の呉音は「フ」であつた。ちなみに「富」と同韻の唇音字もこの事情は全く同様である。参考までに法華經音の例を示しておく。覆フ富フ手フ反、復フ歩フ久フ反、

阜^フ普^フ久^フ反、負^フ普^フ取^フ反、不^フ方^フ復^フ反、浮^フ普^フ爾^フ反、婦^フ復^フ不^フ反、(以上いずれも「本口声字」)

◎漢音資料

。仁和寺本孔雀經卷中平安初期点

富^フ貴

。醍醐寺本法華經釈文

復^フ扶^フ富^フ

。神田本白氏文集卷四天永四年点

富^フ一^フ貴

。蒙求長承三年点

富^フ・義^フ

。凶書寮本文鏡秘府論保延四年点

繁^フ一^フ富^フ

。古文孝經建久六年点

富^フ一^フ貴

。仁和寺本孔雀經卷中建久八年点

富^フ・貴^フ。(は別筆)

。蒙求建保六年写点本

富^フ義^フ

。観智院本世俗諺文鎌倉初期点

「フツキ(富貴)」をめぐって

。富フ一フ春。

。天理本白氏文集卷第四正応二年点

。富フ一フ。貴キ。

。正安本文選正安二年点

富フ一フ。有ユ。

仁和寺本秦中吟延慶二年点

貧フ一フ。富フ。

。蒙求康永四年点

富フ。義キ。

右の様に、漢音資料に於ても鎌倉時代までの資料では「フ」と一字仮名表記であり、且漢音声調は韻書と同じ去声であつたと考えられる。

尚、漢音・吳音という観点からは分類することは不可能であるが、

。三卷本色葉字類抄

殷フ。富フ（前田本）

富貴フ。尊フ者フ部フ分フ富フ豪フフカウ福徳フ同フ不フ垂フ當フ 富有フ

富人フ 福祐フフクユ（黒川本）

。自行三札功德義建保三年写本

巨フ一フ富フ。

の様な資料に於ても一字表記である事は変わり無い。

斯くして、「富」の字音は鎌倉時代までは「フ」と一字仮名の形であり、「フウ」はそれ以後新しく発生した形であろうという見通しが立つ。管見に於る古い「フウ」の形の例はいずれも室町時代以後の次の如き例である。

。文明版聚分韻略

富フ一フ貴フ

。文明本節用集（朱点のみを示す）

富フ一フ。宥ユウ（注略）一樂ラク。一人ジン

富貴フクキ在天テン願願樹樹……唯フクキ富貴人耳

仕官而至將相富貴而帰故郷……

死生有命富貴在天願篇篇

死生有命富貴在天……

妻子サイシ輕フクキ富貴他人重重文文

。天正本節用集

富貴フクキ

。慶長版聚分韻略

富フ一フ貴フ

〔國語辞典類に依れば、これ等の他に「太平記」や「平家物語」の例が示されているが、いずれも成立期の確証とはならず室町期以後の例として取扱うべきものである。〕

ここで注目すべきは、右の字書類の「フウ」は、「富貴」という漢語の音に伴うものとして示されているらしい事である。文明本の例も「一宥」以下の「一」は漢字のみを示すもので、「フウ」の音まで示したとは言えないであろう。⁽²⁾

「フッキ（富貴）」をめぐって

斯くして、「フウ」は鎌倉時代以後「富貴」（或いは「富家」等）という特定の漢語音として長呼される事に依って生じたものと考えられる事になる。従って、当然の事ながら、本来「フウ」という形であった「早」「牛」の場合と全く同じ促音化の過程を前提とする事は出事ないと考えられるのである。

三、「フッキ」発生の契機と時期

東京大学国語研究室蔵孔雀経巻中に次の様な例が見られる。

富貴自在（フクキ）は別伝を示す

この加點時期の識語は存しないが鎌倉初期と考えられ、朱声点墨仮名が全巻に加えられている。そしてまま別筆が加えられているが、これも同時期で異本からの別伝を校合付記したものと考えられる。「富貴」がそれで、これに依って、鎌倉初期に「富」を「フク」と読む場合があった確証が得られる。

仁和寺藏重文無常講式建長元年写本にも、

今生亦富貴之間也

の例が見られる。

国立国会図書館蔵孔雀経巻中にも、

富貴自在

とある。本資料は「貞応三年」八一二二四Vの刊記を有し、「以先師檢校法印房点本之様為品躰之上／集数本点校了元応三年二月廿一日／スリケン権大僧都□□」の奥書が有る。全巻に朱声点墨仮名が加えられているが、所々に刊年直後と思われる墨仮名が見られ、他は殆ど元応三年八一三二一Vの移点の際の仮名である。右の「フクキ」も元応三年の筆であるが、その声点から判断して東大本の別伝の系統に同じであって古くに遡り得る読み方である事が考えられる。

扱、この様に鎌倉初期から或る場合に「富」を「フク」とする誤読（その生じた要因は先引三保氏の論じられる通りであろう）が生じていた事は、直ちにその背後に音声現象としての促音化「フッキ」の可能性を見出す事が出来るのである。

喉内入声字がカ行子音と接続した場合の促音化の確例としては、管見の範囲で真福寺本将門記承徳三年八〇九九V点の別筆仮名に依る

戮害（189行）（漢音原形「リクカイ」）

が最も古い。この例に依って、音声現象として、「「kui」Vと「kai」V」の如き事象が既に院政期に発生していた事になる。国語史料の教える所に依れば、促音が「―ツ―」表記に固定するまでには長期間を要しているのであって、院政はその「ツ」へ固定する前の試行錯誤期と言え、或る学統に於ては別の方法で促音を表示していた（その点については詳しくは別稿に譲る）。その一つの方法に字音点の合符が有った。先引の国会図書館孔雀経の例に於ける合符は、仮名は「フククキ」と有るが、実際の発音が「フックキ」である事を示しているのである。念の為、今同経の合符例を抜出してみると次の如くである。

或一居、毒一害、惡一感、臆一行、或一居、縛一孔雀王（以上卷上）、北一界、欲一國（以上卷中）、或一結（「コツ」「ケツ」貞応頃の古筆）、或一居（以上卷下）

勿論、東大国語研究室本にもこの合符が使用されて居りその機能は同じである。

或一居、毒一害、木一孔、毒一氣、極一受、亦一起（二例）、臆一行、或一居、縛一孔雀王、各一各、（以上卷上）、北一界、極一覺、毒一害、足一行（以上卷中）、獨一覺、角一亢、北一方、獨一角（以上卷下）

この様な喉内入声字の促音化は、右例に明らかな様に殆んど下接字がカ行音に限られて⁽⁴⁾いる。この事情は現代語に於ても同じで、音声的に言つて当然である。

以上の如くにして、「富一貴」の合符例はそれが「「fukki」」という促音形を示したものである事が明らかになる。東大本

鎌倉初期点に合符が加えられていないのは「富貴」の読みが別伝であるが為で、同様な構成に有る例では合符が多数出現しているから、既に鎌倉初期に漢語としての「富貴」は促音化語彙として成立していたと考えてよく、そしてその事を具体的に示すのが三保氏指摘の光明真言土沙勸信記の例という事になる。

これを要するに、「富貴」の促音形を仮名で「フツキ」(或いは「フツクキ」と表記した例は、促音をツで表記するのが一般的になった時期まで待てばよいわけで特に問題ではなく、「富」を「フク」と読むその誤読の発生にこの語形の問題点があったのである。誤読の可能性はいつの時代にも有ったはずで、この「フク」も、本稿での指摘は鎌倉初期の例で止まっているが、当然それ以前に遡り得る可能性は多分に有るから、「フツキ」の淵源は時期的には鎌倉期以前であったと言えるであらう。

四、「富貴」の音形の変遷

かくして、「富貴」の音形は原形の「フクキ」の他に新形の「フウクキ」「フツクキ」の三形が文献に出現するのであるが、ここで管見に及んだ例を以上の三形に分けて時代順に並べてみると次の様になる。

(フー)	(フウー)	(フツー)
孔雀経建久点 富貴 孔雀経鎌倉初期点 富貴		孔雀経鎌倉初期点 富貴 光明真言土沙勸信記(三保

西方指南抄

富貴フツキ

天理本文集卷四

富貴フツキ

易林本節用集

富貴フツキ一有アリ

無刊記原型十行本聚分韻

氏指摘

富貴フツキ (富饒・富人フツキ)

無常講式

富貴フツキ

孔雀経元応三年点

富フツキ一貴キ

文明本節用集

富貴フツキ一有アリ：

明応本節用集

富貴フツキ

黒本本節用集

富貴フツキ

印度本節用集 (弘治二年本)

富貴フツキ

同右永祿二年本

富貴フツキ (一有アリ)

枳園本節用集

富貴フツキ

「フツキ (富貴)」をめぐって

略

富^フ一貴

慶長版聚分韻略

富^フ一貴
ヒツ

富^{フツ}貴^キ (富^{フツ}卷^キ)⁽⁵⁾

饅頭屋本節用集

富^{フツ}貴^キ

国会図書館本百舌往来

富^{フツ}一貴^キ

ロドリゲス日本大文典⁽⁶⁾

Fuquji

日葡辞書

Fuqji

英和語林集成

Fuki or Fuki

日葡辞書

Fuqji

英和語林集成

Fuki or Fuki

「富」字は見慣れた字であったであろう字書類以外ではその付音例が見出しにくく、尚今後用例の発見に努めねばならないが、右の一覽に依って大略次の様な事が言えそうである。

鎌倉時代には「フクキ」と「フツクキ」が併存していた。「フク」となるか「フツ」となるかは下接字の有声・無声に対応するのであるから「フククキ」は「フツクキ」に撰して考えられる事勿論である。「フツクキ」使用場に於ては当然有声音字下接の場合には「フクネウ」「フクニム」「フクユウ」の形が出現している。その後、「フクキ」の長音化した「フウクキ」が出現した。室町時代までにはかくて「フキ」「フウキ」「フツキ」の三形が併存する事となった。「クキ」は室町期までに直音化した。更に江戸期になる

と、その中の「フキ」が口語の世界から消えたと思われる。

現代語に於ては、既に「フツキ」を（古語）と注する辞典も有る様に、更にこの語形も口語の世界から消えて行こうとしている。この様に語形の消長が見られる事は、この「富」を構成要素とする漢語群の一つ一つの口語に於る消長とも相關関係が有るであろう。現代語に於て「富貴」の勢力が衰えて行つたのは、かつての「富」を構成要素として優勢であった漢語フクキ Ⅱ即ち節用集等の「富フクキ有」の如きものⅡが使用語彙として存在しなくなった所にも一因を見出す事が出来るであろう。

ところで、「富」を「フク」とする誤読はその音符「富」を共有する字への類推に依つて生じたと思ふ事には異論は無からうが、この様な誤読は百姓読みとも呼ばれ屢々論に上げられ文献の具体的な例も指摘されて来た所であり、その出現の可能性は、一字一字を韻書なり字書なりで確認するという学習形態から離れる程高くなるはずである。文字生活に於て常にそういう学習形態を取る事は不可能であり亦必要ともしない。従つて誤読の危険性は常に存在したのであり、「フク」の出現はそういうもの一つであるから、その早い例が光明真言土沙勸信記や無常講式という口頭語的・口誦的文献に見られるのも故なしとしないであろう。一方孔雀經の如きは、伝統性をよく保持して口誦口受的である面と、その故に韻書・字書に依る学習形態を取らない面との二面が有り、仁和寺本や東大本の「フクキ」はその前者の面が、新しい東大本別伝や国会図書館本の「フククキ」はその後者の面が、露呈したものと解釈出来るのではなからうか。文集の如き博士家の訓点本が正しい「フクキ」の形を保っているのも亦、従つて故無しとしない。かく考えれば、先に鎌倉期には「フクキ」と「フツキ」が併存していたと言つたが、その併存は同一位相に於る混在では無く、位相を異にするものであったと考えるべきであろう。室町期に至つて、文明本の如き博士家点本を素材に作られた字書に、正しい形にもとづく「フウキ」の形が、そしてその他の多くの節用集やキリシタン資料が殆ど「フツキ」の形を登録し優勢であつたと思われるのも、そういう前代の文章語的・口頭語的とも言える位相差を引き継いだと考える事に依つて理解出来るのではなからうか。

五、早・牛との関係

浜田氏の論に代表される如く、従来多くの場合「フッキ」は「サッキユウ」「サツソク」「ギツシャ」と平行的な関係に在るものとされて来た。それ故にこれを「フウキ」の音便と注する辞書も見られるのであるが、以上の検討に依って、この「富貴」は「早急」「早速」「牛車」とは全く別の要因によって鎌倉時代（以前）に成立したものであり、辞書的取扱いで言えば「遡及」と全く同列に扱うべきものであったとするのが本稿の結論である。

尚、その、別の系列である「早急」「牛車」等の成立については亦別に検討してみる必要が有るであろう。

注

- (1) 本来-u音で終る字が唇内入声音と誤認された例は確かに容易に指摘することが可能である。が更にそれが促音化した例が指摘し難い事実と理由については、奥村三雄氏も『法服』の如き、唇内入声の促音化表記に対し、「高・草・秋・流」など、もともと-u音だった字音は、促音化することがない故、唇内入声の促音化は、少くとも、「フ↓ウ」というハ行転呼現象以前に起ったと見なされる』とされている（『講座国語史 音韻史・文字史』第二章二二促音の発達）。
- (2) 節用集等の室町時代以降の字書類には「富有（宥）」を「フウユウ」とした確例がないようである。逆に「富家」を「フウカ」とした例は文明本節用集などに見られることから、「フ」の長音化は、「富」を上部構成素として全体で二字仮名形となる場合に発生した可能性が大きいと思われる。「詩歌」「夫子」「夫婦」「最良」等と同じ方向での変化と考えられまいか。
- (3) 拙稿「漢字音における促首の表示法」（『国文学放』第69号）。
- (4) 喉内入声字の促首化例は小林芳規博士（『中世片仮名文の国語史的研究』広島大学文学部紀要・特輯号3、「訓点資料に現れた中世語について」同上第32巻1号等）等によって院政、鎌倉時代の例が示されているが、殆どカ行音が下接した場合に限られる。カ行音以外の例は主旨語彙的に固定していたと思われる。例えば「北方」は東京大学国語研究室本大般若経建長校本にも、「独居、独覚、極光、欲界、各各、亦各」等によって、「北方」と有る。亦「独歩」が観智院本世俗諺文、西方指南抄に共通して見えるのも固定化をうかがう一助とすることができよう。

(5) 印度本の堯空本等にも「富貴」の用例は見出されるが、以上の用例でこの期の実情は理解出来ようから他は省略に従う。

(6) 古典文学大系「今昔物語集」の一―一頁(巻第一、須達長者、造祇園精舎語第卅一)には、「富貴」の注に、天草本平家物語・金句集・サントスの御作業・ギヤドペカドル字集によって付首した旨が記してある。当時の「フッキ」の勢力がこれ等キリシタン資料によってもうかがえるのである。

(7) 例えば築島裕博士「興福寺大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究、研究篇」や「平安時代語新論」四三二頁「百姓読」にも言及があり、「明濬」「風巖」「夸父」「睽離」「発揮」等の具体例が示されている。鎌倉期以前における、例えば楊守敬旧藏本将門記にも、諠譁14頁1行、李陵505、侘人394、裸形414、謁望483、祇候485、寃枉546等が、亦真福寺本将門記承徳三年点にも、禁遏60行、盗跡197、祇候345等が、和泉往来文治二年点にも、納隍23行、親昵37、捍謁65、哀憐27、老邁247等が容易に見出せるのである。従ってこういう場においては、「フッキ」の生ずる可能性は常に在ったことを考えねばならない。

(8) 従って、先考の説では新明解国語辞典及び三保氏の考え方に全面的に服するものであることを明記しておきたい。